

「ほっと・ルーム」での援助活動とコラボレーション

報告書 センター教授 亀口憲治

1. 「ほっと・ルーム」の4年間

ほっと・ルームができて、ちょうど4周年になります。私も毎週学校に来るようになって4年経ったわけです。で、4年全部を振り返る機会は今はないです。時間もないので。簡単にしかお話できませんけれども、前半の2年と後半の2年、特に中等教育学校に変わってからというのは大きな変化が起こっているわけですから、昨年と今年だけでちょっとお話をしたいと思います。で、個別のことは、いろいろプライバシーの問題もありますし、詳しくお話できませんので、外側の数字だけ申し上げますと、とても気になっていることがあります。ほっと・ルームで、個別の面接を生徒が求めてきて行った、という件数だけを申し上げますと、昨年度の4月はゼロです。5月が5件、6月が5件、7月が5件、8月がまあ夏休みですので臨時的に1件だけ、9月がゼロでした。今年度はというと、4月が4件、5月が23件、6月が14件、7月が22件、8月が夏休みですが要請があって4件、9月は月曜が休みばかりでしたので、われわれがほっと・ルームを実施したのは実質木曜だけの3回でしたが、13件でした。総数は昨年度に比べますと、今年度は4倍、とても気になっています。とても大変です。個別のことは申し上げませんが、生徒たちが相談を非常に求めてきている。それ以外のオープンルームは、今年度は特にやっておりません。昨年度はやっておりましたが、今年度ももう一日まあ20人以上がやってきています。その中には気になる子もいるんですが、個別の対応はできませんので、少し様子を見る、という感じになっています。この数字が何を意味しているのか、私自身は週に1回ですし、助手の長谷川さんは月曜と木曜の2回だけ来ています。非常に限られた接触です。それから今日も先ほどまでやっていましたが、大学と附属学校の連携ということで、3年前から2コマ、毎年20数コマ、ですから私考えると授業を150回くらい、この学校でさせていただいて、大変貴重な経験をさせていただいています。大学の教官で、学校、ここは国立ですけども、附属の教官と連携して、毎週、丸々2時間ですね、6年生なんですけれども、ずっと継続して授業ができると、今日も全員出席で、このところ毎回全員出席でびっくりしてますけれども、きわ

めて、生徒たちが熱心だということを感じています。そういう手ごたえとですね、個別面接を申し込んできた生徒の数が昨年から4倍になっているということが何なんだろうか？ということがとても気になっております。これをどうこう推測するというのは、私は立場上あまりするべきではないと思うのですが、ただ、この状況がずっと続いていいというふうにはやっぱり思えない。ですから、これは、全体をご覧になっている皆さんのほうから、どうしようという提案なりですね、あるいは我々に対してこういうことをこうしようっていうのが何かあれば、いろいろな形で協力したいと私自身は思っておりますし、機会があれば、中学生、思春期の非常に揺れ動く心理とか、友だち関係での悩みとかですね、そういう悩みをたくさん、普通に持っているはずですね。そのへんの話も、我々の専門としての立場からお話できる機会があれば、お話したいということは昨年来申し上げていますが、残念ながらその機会がありませんので、ちょっとお話できませんけれども、私自身はそういう心積もりではあります。ですから是非、活用していただきたいと思ってるんで、まああまり私は活用されているようには感じないと思うものですから、上手にそれをしていただけたら、ただ、私もあまり暇とはいえない立場におりますものですから、総長補佐という役割をやらされて、この10月からさらに何か大変な状況におかれているのですが、これは私は別のことだと思っていますので、可能な限り、この学校にもすでに4年も来ておりますし、たくさんのお子もたちに出会ってきました。今日も、臨時に、ジョージア大のヘイズ教授、それからゴードン先生もこられてますけれど、そういう国際的なバックアップとか、非常に最先端ですね、問題に対する対処の支援を提供できます。これは国際的にも注目、すでにされ始めていますので、そういう資源をぜひ有効に利用していただきたい。そういうときになって個別相談を4倍も生徒自身が申し出てきているのか、あるいは、これも個別のことは申し上げられませんが、私自身の専門は家族療法ということで、子どもの問題は親ときょうだい、おじいちゃん・おばあちゃんも含めてですね、取り組んでいく必要があるんで、家族との面接をやっております、で、これも個別のこと

は申し上げられませんが、大学の心理教育相談室の方がいいというときはそちらでやったり、こちらであったり、ある子どもの、まあ不登校気味の場合はですね、おじいちゃんも出てきたりする。一緒に話をして、まあ微妙なところで推移してますけれども我々、やれることはやろうと思っていますね。そういう意味で、この4倍になっているということを少し共通の課題としてですね、考えていきたいなと思ってですね、そのことをどういうふうにやればいいのかということは実は、先ほどの学力の問題、我々がやることは学力の基礎の部分にかかわる学習に対する意欲とか、構えとかいうことに直結するというふうに理解しております。ですから、我々が表面的には学力問題とか謳うことはいないんですけども、十分にそのことを意識して、学力の一番基礎の部分、場合によっては生きる意欲っていいですか、あの、もう生きていることはいやだと断りだす子も実はたくさんいるんですね。その子どもたちに会ってますので、そのことを先生方がどういうふうにお考えなのかということをお共有できる場が私はほしいなと、思いつつ、あまり得られていないということで、是非。4年前、私が来たときにはそういう機会は毎月ありました。校長も含めてですね。それがいつのまにか消えてしまったのは学校が変わったからなんですけれども、やはり貴重な機会だったので、そういうことは全てこの学校でやってましたので、少しお考えいただければと、これは私の方からのお願いなんですけれども。いずれにしても私自身はまあ、コラボレーション、連携ということをずっとこの間テーマにしてきております。それは学校と家族もそうだし、大学の教官と附属の先生達もそうですし、生徒同士のピアコラボレーションとか、ピアサポートという仲間同士の助け合いということも非常に大事であります。そういうことをテーマにして論文なども書いておりますので、そういう点ではいろんな連携が可能であると思っています。で、そのためにいろんな文献等も準備して、ときにはお配りしたりしているものですが、あんまりこう、フィードバックを感じられることもないので、是非あの遠慮なく色々なコメントを、意見や提案をですね、寄せて頂きたい。我々は必ずお返しするつもりにしていますので。その点でも活用をしていただければと思っています。ただ、時間的な制約があるので、どういうふうにでも応じられるというわけでもないのですが、是非そういうふうに考えたい、というかまあお願いのようなものです。

2. 「オープンルーム」の試み

そうですね、昨年度オープンルームということで、ボ

ランティアの先生方がある程度の可能な時間帯をつめていました。そこに子どもたちが、特定の相談ということではなく、なんとなく居場所としていられるというような意味でのオープンルーム活動というのが展開しています。私自身は直接は覗いてませんけれども、生徒たちがかなり活用していた面はあったと思います。そのことと、昨年度の相談件数と極めて我々からすると非常に少ない、というのは、2000年度と比べますと、相談件数はガタ減りなんですね。非常に減っている。しかも昨年度の場合は、不登校の子どもは、昨年度はほとんどゼロに近かったと思います。大変なパフォーマンスといえますか、不登校を出さないでやれる学校の状態だった。ところが、今年度はそのオープンルームが、色々な事情で開設できないということになって、我々が来ている休み時間には子どもが続々と来ている状態なのですが、それと関連がないというふうにはどうしても考えられないので、具体的にはオープンルームをどのように運営されるかということをお我々がうんぬんするよりは、管理職の先生も含めてですね、みなさんで、まあこれは余分な活動かもしれないという気はしますけれども、本来であれば先生達がなんらかの準備ができる時間を割いて生徒のために時間を取るという出血サービスですから、それはあの、お願いできることではないですすね。ただ、それを昨年度はおやりになっていたことの効果を、私自身は感じております。それは主観的ですが、今年度の前半期の数字を見ますと、やはり月水金、生徒たちがオープンルームという場所を活用できないということと、無関係ではないというふうに感じてますので、もし、自発的に先生がたが組織されて、どの時間帯ということは私の方から直接申し上げませんが、1時間でも少し、特典でないけれども部屋を有効に利用させる、で、管理職の先生が、管理上の責任をきちんと負うという形で協力していただければ、生徒たちは間違えなくよろこぶと思います。でそのよろこぶという意味あいは、色々あるのですが、今日は控えますけれども、生徒達が求めているのは間違いありません。それはもう曰く言いがたい思いをたくさん抱えております。それは自分自身のことだけではなくて、自分の親だったり、まあ亡くなりかけているようなおじいちゃん、おばあちゃんのことであったり、というふうに大人が背負うべきものを子どもが背負わされていないかをですね、で、それが学習に対する構えとかちあわせになっています。思春期自体、非常に揺れ動く心理状態ですすし、こういう社会変化が非常に大きなところで、そういう影響が一番、子どもたちにしわ寄せが来ている、ストレスがかかっています。ですから、これを個別面接

だけでは到底対応できません。そこを是非工夫していただければな、と。ただ、それを我々があしろうしろという気は全然ありませんので、先生方である程度自主的に、自分たちにいいように組織してですね、可能な範囲で、無理なさらないで、1時間しか駄目だというなら週1でも私はいいと思うんですね。で、もし足りなければ、院生などで、こういう領域に関心を持った学生は、幸いに、数多くはないんですけども多少はいますので、やはり院生のボランティアを募ってですね、教育をさせていただくということは、可能だろうというふうに思っております。しかし、受け容れる体制が整ってないところで、院生に何をやるか。学童教室といいますか、そういう形で面倒を見させるということはちょっと私はできないなと。やはり先生方が主導で、体制をとっていただき、それを院生が少しお手伝いできればと。

コラボレーションでいえば、院生が我々の来ないときに先生たちと一緒にオープンルームを運営する、生徒の面倒を見るということは提案できると思います。

3. コラボレーションの提案

具体的にやるとすればですね、難しい問題というより、我々も関わって問題解決に向かったという解決策の例を扱うほうがいいと思うんですね。やっぱり難しいことは、責任論になって、どっちがあっちがということになりま

すから、そうじゃなくて、その障害や問題を乗り越えたっという成功事例をできるだけ共有してというふうにも、もし具体化するのであれば、最初のうちはそういうふうで、徐々に難しい事例は後半にといいますか、何回か経ったところにかかげる。

学校の中で、授業の中で、今生徒たちがどのようにやりとりしているかということについては、我々は大学で仕事をして、臨床をやってますけれども、学校の中のことはやっぱり覗けなかったわけですよ。それが、4年前私がこちらに来始めてから、やはり個別相談だけでは生の先生方の抱えている問題だとか、生徒の抱える問題だとかを感じ取れないというふうに思いましたので、4年前から授業にでかけていって、3年前から臨床心理入門ということで6年生だけですけど、ずっとやってきていると。その体験は私の中ではどういうふうにも子どもたちが難しいかということもかなり分かってきたので、学年の先生達と場が共有できれば、いくらでもいろんなことが共有できると今は思っている。4年前はほとんどそれができなかった。臨床心理の専門としてはできますけれど、学校については我々はストックがなかった。ま、4年である程度の共通項がわかったように思いますので、そういう話し合う機会があればぜひ、事が起こってからではなく、予防的に対応できればと思っています。